# 熊野灘

想定外の天災がまた起きた。東日本大災害から半年近く、復興もあまりはかどらない時期に、今度は台風十二号が、紀伊半島を襲った。死者、行方不明者を含め、百人近くの人が犠牲になったのだ。記録的豪雨、ゲリラ豪雨というが、五日間降り続いた大雨が、熊野川、那智川を氾濫させ、土石流を引き起こし、堤防を決壊した濁流は、周辺の人家を呑みこみ、まさに津波のエネルギーに匹敵するような水の破壊力をテレビは映し出した。岩手県宮古市の防潮堤は高さ十メートルもあって、住民は絶対の信頼をよせていたというし、三重県紀宝町の堤防も、安心できるほどの頑強さで造られていて、それをのり超えるほどの大水が出るなど、想像さえしなかったという。われわれ人間の営みは、自然の破壊力の前に成す術もなく、ただ「想定外」と驚くことが多いのだ。

台風十二号は八月末に発生したのだが、最初の予報では、九月一、二日ごろ、東海、関東を直撃するかも知れないということで、大型で速度が遅く（時速十キロ、自転車並み）、上陸する前から、かなりの被害も予想されており、私もいつも面倒でほったら

かしの雨戸を家中回って閉めて、戸締りに注意を払っていた。ところが直前に進路を西に変え、四国から紀伊半島方面に上陸し、普段でも雨の多い紀伊半島（年にざっと三千ミリ、東京の倍は降るという）に甚大な被害をもたらした。一年の四分の三の雨が降ったことになるという和歌山、奈良、そして三重。新宮市はわずか五日間で千八百ミリの降雨量を記録したという。

家族を失いながらも、陣頭指揮にあたる勝浦町長の姿は悲痛そのものであった。二〇一一年は災害の年として、忘れられない年になるだろう。

昨年（二〇一〇年）五月、紀伊半島を旅行した。熊野三山、那智の滝、そして高野山をめぐるというツアーの行程も魅力があったが、芥川賞作家、中上健次の文学の原点である深山に囲まれた熊野の地を訪ねて見たいと、かねがね思っていたのも大きな理由である。熊野は神話の宝庫でもあるようで、ゆかりの神社が多く、バスガイドの説明で初めて知ることが多く、勉強不足で参加したことを後悔した。

中上健次は、紀伊山地の、いわゆる被差別部落の出身で、その土地を「路地」と呼ぶという。新宮高校を卒業後、上京して、ジャズや新左翼、小劇場運動の渦に入る。

その後、さまざまな職に付き、その合間に短編を次々に発表。作風は、大きく大江健三郎の影響の下で、都会の青年の反抗や弧絶を描いたものと、郷土をバックにした自伝的な作品とに分けられるが、『枯木灘』はまさしく後者の作品であろう。代表作『岬』で第七十四回芥川賞を受賞したが『枯木灘』はその延長線上にある作品といわれている。

また、ニューヨークやサンタモニカ、ソウルなどにも滞在し、数多くの作品で、旺盛な筆力を発揮した。一九九二年、腎臓願のため、四十六歳で永眠。早世を大変に惜しまれた作家の一人である。

中上健次の作品に、特に惹かれているわけでもないし、数多く読んでもいない。むしろ一読して読み難くさえある、粘っこい表現で、土着のしがらみを書いたものは、最初の数行で敬遠することが多かった。しかし長編『枯木灘』は、努力して読み通した作品として愛着がある。いかにも「大作を読み終えた」という達成感を実感できるスケールの大きい内容ではあった。そこから伝わってくる「熊野」という因習深い土地に住む一族の暮らしぶりを想像し、陰鬱な人間関係を通してその背景となった風景を、自分の目で一度見ておきたいと思っていたのである。彼自身が書いているように

「枯木灘」とは平地の少ない和歌山の中でも、この海岸線が一等少ない、とのこと。

『枯木灘』の主人公は二十六歳の竹原秋幸。父は土地の人たちに「蝿の王」とか「ケダモン」などといわれている浜村龍三で、秋幸が三歳のときに、刑務所から出てきた。彼は三人の女に子供を生ませていた。秋幸には何人かの腹違いの兄弟、姉妹がいることになる。母、つたはそんな夫にたえかね、秋幸を連れて別の男、竹村繁蔵の所に嫁した。腹違いの兄、郁男は二十四歳のとき、首を吊って自殺。妹の美恵に恋をし、美恵がそれを拒否して他の男性と駆け落ちしたという噂もある。兄弟、姉妹との、濃密で複雑な絡み合い、愛し合うか、暴力か、「路地」と呼ばれる狭い地域で、繰り広げられる、まさに情念の小説である。血でつながれた一族の絡み合い。クライマックスで、秋幸はある意図をもって、父龍蔵に会いに行く。龍蔵に何かを示さなければ生きていけないという強い思い。考えた末に、「血族」の問題をつきつけることであった。

彼は腹違いの妹、さと子と関係を持ったと、父に告げてみようと思ったのである。父の返事の如何によって、自分の手がかりとして考えてみたかったのである。ところが父、龍蔵は「二人ともわしの子じゃ」と笑っただけであった。父は「血」の問題で

さえ飲み込んでしまうほどの人物だったのである。「噂こそ真実である」という路地の風習。秋幸はさと子との「兄妹心中」という噂を作りたかったのであるが、それは噂ではなく、「生きた記憶」となってしまうのである。

十九歳となった腹違いの弟秀雄は、叔父の初盆のとき、秋幸が父のことを「おまえ」と呼ぶのが気に入らないと、石を持って秋幸に殴りかかった。秋幸は、秀雄の目のなかに暴力的なものをみて、秀雄を殴り殺す。秀雄の通夜の夜に秋幸は自首する。「路地」から離れられないのはなぜか。と自問しながら。

自殺や殺人、兄弟姉妹間の愛憎など、浜村一族の血を通して熊野という閉鎖的で因習深い土地を舞台にエネルギッシュなドラマが繰り広げられるのだが、人間関係の複雑さは何度も読み返さないと理解できないほど込み入ったものであり、スケールの大きさ、それが中上健次という作家の個性なのだろう。やっと読み終えた私は、心の奥底に、おりのようによどんでしまったこの作品の細部を、忘れることはできなかった。熊野の山地を見たいという思いが長いことわだかまっていたのである。

ツアーの日程は、勝浦温泉「ホテル浦島」に一泊して、熊野古道、那智の滝、四百

六十七段の階段を上って、那智大社を参拝し、熊野本宮大社を回って、道路沿いにせまってくる鬱蒼とした山々を右に見ながら、熊野川に沿って曲がりくねった道をバスに揺れながら走って高野山に抜けるというものだった。やがて十津川村に到着。ツアーの目玉の一つである「谷瀬のつり橋」を渡る。今回の台風で被害を出した十津川村は、谷あいの、山肌に張り付くように散在する本当に静かな村であった。

長さ二百九十七メートルにも及ぶつり橋の真ん中から、村のたたずまいを眺め、熊野の奥深さを見たように思った。車の走る道路も寸断されるくらいだから、あのつり橋も、流されてしまったのだろうか。

その後、われわれツアー客を乗せたバスは高野山へと向かうのであるが、今回の台風十二号で、緑豊かな紀伊山地が、無残にも山崩れをおこし、地肌があらわになっているのをテレビで見て、本当に心が痛んだ。しかし考えてみれば、どんな僻地といわれる山奥の村にも、閉鎖的であるほど、通りすがりの旅行者にはわかりようのない、そこで一生を過ごす人たちのつむぎだす生の人間むき出しの怨念に彩られたドラマはあるだろう。

「東京砂漠」というコマーシャルソングがあったが、都会ほど、人間関係は希薄で、

砂漠化しているようである。アパートでひっそりと餓死していく人たちのニュースを新聞などで読むと慄然とする。その点、田舎の風習は、お互いが干渉し合い、良くも悪くも絶えず他人を見つめている（『枯木灘』でも、見る、見られているという意識を強調している）隣近所の目がある。助け合うことは他人の生活に入り込むことであり、愛憎の根源ともなる。「隣は何をする人ぞ」という生き方を望むか、回りの人たちに囲まれて情念のるつぼにはまるか、人それぞれの好みであろう。

中上自身、新宮高校を卒業して上京したさい、「なによりも自由な感じが気に入った。東京という都市に出てくることが、風土や、切っても切れない血の関係から自由になるということを意味するなら……（作家と肉体）といっている。

しかし、それが負の面で噴出したとき、思いがけない愛憎が噴出する。社会のあり方の難しさ、人間の、未知の部分の闇。割り切ることのできない混沌。

「枯木灘」は愛憎という暴力的な「絆」によって結ばれている僻村の、一族のあり方を迫力ある文体で描いた。

「孤独」は人間の宿命であり、何代にも続く血族の中にあっても、究極は孤独をま

ぬかれることはできない。ほどほどの距離を保ち、何かあれば他人の役に立つ、あくまでも節度をもって接する「絆」で結ばれるのがいいのだと思っている。

（二〇一一年九月）